

会衆歌と公共性

—ウェスレーの宗教体験と初期メソヂストの讃美歌を巡って—

Publicness and Community song

—The Hymnody among the Methodists in the 18th Century—

教職センター

山本 美紀

YAMAMOTO, Miki

Teacher Training Center

キーワード：公共性，コミュニティー，個人と共同体，体験，音楽，ジョン・ウェスレー，メソヂスト，歌，讃美歌，

Abstract : The purpose of this article is especially focused upon the role of singing hymns among the people called “Methodist” of the 18th century in the process of making up their new community out of their conventional society.

Methodism is a religious Revivalism in the Church of England of the 18th century developed by Rev. John Wesley (1703-91). Especially by singing they not only confess their faith but realize the sense of experiential unity.

The Church of England after the Religious Reformation has provided the norm and the morality to the community as a public religion based upon its own tradition. It was possible only in the parish where people had long been bonded. However, “Methodist” are those who have been broken from these bondage due to the Industrial Revolution.

“Methodism” is from the outset characterized by John Wesley’s personal spiritual awakening. His spiritual experience has been a criterion for the Methodists. It would be regarded that hymns as an communal song has greatly influenced to build up their unity. A consideration upon Methodist’s hymns would possibly provide a new insight of understanding a sense of the public spirit which an individual could experience from conventional religious practices into a new religious sense.

Keywords : Publicness, community, self-experience, song, hymnody, Methodism, music, John Wesley

I. はじめに

メソヂストは、産業革命によって社会構造が激変する中、地方からの労働者を中心に新たな絆で結ばれ、社会現象ともなった信仰復興運動であるメソヂズム Methodismを推進したグループの名称である。ある学者によれば、激動の19世紀ヨーロッパでイギリスが革命を経験しなかったのは、メソヂズムを中心とした信仰復興運動のためであるとする。またマックス・ウェバーは『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精

神』において、モットーとしてウェスレーの言葉である “Gain all you can, Save all you can, and Give all you can!” 「大いに獲得し、大いに節約し、大いに捧げなさい」という言葉を用いていた（山内 1990, 14）。これらは、メソヂストが社会的にどれほどの影響力を与えていたのかを物語るものとも言えるだろう。この運動によって生まれたものには、現代の私たちになじみのあるジュースメーカー「Welch」もある。これは、禁酒運動を推進するメソヂストが、聖餐式のために用いる葡萄酒を「発酵させないぶどう液」で

代用することで生まれたものである。

本研究では、このような社会現象にまでなった「メソディズム運動」の初期において、讃美歌が指導者ウェスレーによってどのような位置づけを与えられ、その発展期にいかなる役割を果たしたのか、その一端を、「公共性」の視点から考察することを目的とする。

まず、メソディストの社会的位置づけを明確にするために、既存の宗教と社会との関係を、メソディストのそれと比較を通して概観し、続いてウェスレーがメソディストの組織化に讃美歌を用いるに至ったプロセスをたどる。その後、彼の個人的体験が共同体の共通体験となることを「メソディストの原点」として歌われ続けている讃美歌を例に、考察をすすめていきたい。

Ⅱ. 18-19世紀初頭のメソディストとその背景

1. 既存の宗教世界とメソディズム運動

2003年に開催された第53回公共哲学京都フォーラム「宗教と公共世界-公共宗教は可能か?」から生まれた『宗教から考える公共性』の中で、高柳俊一はカトリックの立場から「キリスト教の教会は多元的社会において生まれ、本質的に公共宗教であると言うこともできる。」(高柳 2006, 149)とし、さらに「教会史全体をかえりみれば、カトリック教会は常に例外無しに『公共宗教』であることを意識し、そう主張して来た」(高柳 2006, 152)と言う。ここでの「公共宗教」というのは、前者は「多元的社会において生まれた」というその発生において、また後者は「歴史を通じて多くの者が共有する」という意味をうけてのものであろう。これをさらに突き詰めると、公共宗教が「公共宗教」として機能してきたのは、「[19世紀末まで] 国家はその存続のために宗教的伝統とそれによって培われた道徳を必要とすると考えていた」ためであった。つまり、カトリックやプロテスタント・キリスト教は、国家という1つの共同体において、自然法にもとづく道徳規範として人々をつなぎとめ、国家を支えていたということなのである。

但し、イギリスにおいては、事情が少々異なっていた。「王権の下に国教会としてイングランド教会(Ecclesia Anglicana)を確立した英国において19世紀に至るまでカトリック教会は地下教会であり、カトリック解放法(1829年)によって公認されるまで社会における公的役割から除外された。国教会以外のプロテスタント諸派も程度の差があったにせよ同様であった。一中略— こうして英国には今なお国教会的文化

と非国教会的文化の違いが存在する。」(高柳 2006, 154)。言うまでもなく、イギリスにおいて「公共宗教」とは国教会であり、長らく「国教会」VS「非国教会」という枠組みで、物事が判断されてきたのである。これは、メソディスト運動を考える場合、私たちがまず押さえておかなければならないことである。なぜなら、メソディストを指導したジョン・ウェスレー(John Wesley 1703-1791)は、その弟チャールズと共に、死ぬまで国教会の司祭であり、いわゆる「ガチガチの国教会派」とされる「ハイ・チャーチ」派に属する人物だったからである。

2. メソディストとメソディスト運動(メソディズム Methodism)

そもそもメソディスト運動は、オックスフォード大学内でジョンの弟チャールズ・ウェスレー(Charles Wesley 1707-1788)ら有志によって大学内の宗教的サークル活動として始められたという経緯があった。「メソディスト」という呼び名そのものは、サークル「ホーリー・クラブ」の活動を行う彼らに対して付けられた、いわばあだ名であった。彼らはともに集まり、聖餐式を行い、祈り、自分たちの取り決め通り、几帳面な生活を送った。そのようなメソッド通りに行う彼らを「メソディスト=堅物者」と呼んだのである。それら若者たちの小さな活動がイギリスの宗教界のみならず、社会的な影響力を持つまでに成長した背景には、産業革命をきっかけとした社会構造の劇的な転換とウェスレー自身の卓越したリーダー・シップがあったと言われている。

①接点としてのメソディズム —メソディストがつかないもの

先述したように、ジョン・ウェスレー自身は、終生イギリス国教会の司祭であり、メソディストがプロテスタントの一派として国教会から独立したのは、ウェスレーの死後であった。つまりメソディスト運動は、当初イギリス国教会の改革運動の位置を占めていたのである。実際、ウェスレーは自らが導く集会所と、彼の信徒たちが所属する教会の礼拝スケジュールが重ならないように配慮していたとさえ伝えられている(ショウ 2004, 9)。とはいえ、彼自身は後に、「教会以外で聖書を語ってはいけない」という規則に反して野外説教に踏み切ったことにより、イギリス国教会から説教を禁止されてしまう。

メソディスト運動はこのように、生まれた当初から

相反する要素を内包するものであったと言えよう。これを神学者の山内一郎は「ポリフォニック=多音楽」と呼び（山内 2004, 4）¹、宗教学者の山中弘は「当時の宗教領域の二重構造を形づくっていた公的宗教と民衆宗教という二つの宗教領域を架橋する存在であった」と指摘する（山中 1990, 15-17）。

山中の言う「公的宗教」と「民衆宗教」というのは、言うまでもなく「イギリス国教会」と「それ以外」のことである。さらに山中の場合は「それ以外」の中に非国教会という意味だけでなく、同時に、「正統でも体系的でもないキリスト教の教義と概念を含む宗教的信念と実践」も包括している（山中 1990, 15）。つまり、「国教会という公的宗教の周辺に巨大な民衆的宗教世界」があり、それはとどのつまり「エリートの社会と民衆宗教的世界」で、この2つの世界の接点にメソディスト運動があったとするのだ。この論拠を山中は、ウェスレー自身がオックスフォード大学出身の司祭であったにもかかわらず、民衆宗教においてよく取りざたされる心霊現象に関して、彼が日記にたびたび記していることに求めている。他にもこの構図は、ウェスレーがエリート・コースの出身でありながら、信徒として相手にしたのが地方出身の「労働者階級」であったということにも見ることができるだろう。この2項対立は、メソディストの発展とともにさらに推し進められ、メソディストたちは両者の「宗教勢力の境界を曖昧なものにした」、つまり彼らは「国教徒であって国教徒ではなく、非国教徒であって非国教徒でないという誠に奇妙な集団」を構成していった（山中 1990, 17）。

②初期メソディストと呼ばれた人々

さて、18世紀イギリスの産業革命とは社会変動であり、それは同時に、社会生活の多元化によって「組織宗教的宗教集団が展開しうる」流動的な土壌を提供した。つまり、「国教会の教区」で分割され理解されていた既存の共同体と、それに伴う秩序体系を変化・解体してしまったのである。この現象を人口の構図から見ると、「教区の規模が大きく、教区牧師の監督が十分にゆきとどかない地域に人口が集中」し、それが急激に起こったがゆえに「国教会の組織の不応と機能障害」を招くこととなった（山中 1990, 32）²。

このことから初期メソディストのメンバーは19世紀前半まで、急激な人口構図の変化によって国教会が「機能不全」を起こした地域、つまり「国教会の勢力が伝統的に脆弱であった地域」で、特に社会階層においては製造業者³中心の、いわば社会の下層中産階級によっ

て構成されていた（山中 1990, 38）。彼らは地域の共同体における自明性、また国教会の一元支配を可能としていたシステムの崩壊によって、国教会の教区民としての「土地（地域）」とのつながりから解かれ、いわば「根無し草」になった人々だった。さらにメソディストは、当該階級における準拠集団となっており、個人の判断や行動のよりどころとなっていた。この「よりどころ」となる行動規範と良心、道徳心こそがメソディストの「メソディスト」とあだ名されたゆえんであり、それをメンバーに浸透させていったのが讃美であると考えられるのである。

Ⅲ. メソディストの音楽とジョン・ウェスレー

メソディストと讃美を語る際に、いつも引き合いに出されるエピソードがいくつかある。1つは、1787年にヴィンセント博士が言った「説教に魅せられて英国国教会から離れた人1人に対して、10人が音楽に魅せられた」⁴との言葉、もう1つは、「メソディスト教会は偉大な音楽家を誰も生み出していない。優秀な人たちはこの教会には残らなかった」⁵というものだ。一見相矛盾するものと思われるこの2つの言葉は、どちらも事実である。

2007年はジョンの弟チャールズ・ウェスレー生誕300周年記念の年であった。そのためメソディスト系の教会のみならず、彼にちなんだ様々な音楽がらみの記念行事が多くもたれたが、チャールズは讃美歌の旋律を作曲したわけではない。もっとも、彼の詩は、（詩的見地から）非常に音楽的であったと言われている（馬淵 2007, 60）。裕福な階級の女性と結婚した彼の自邸には、パイプオルガンやチェンバロが設置され、音楽のサロンが定期的に開かれていたという。彼の息子たちも二重奏やソロコンサートをそこで開き、音楽的に豊かな日常があったことがうかがわれる⁶。

また、その2人の息子チャールズ（長男）とサミュエル（次男）、またその息子サミュエルが19世紀イギリスの有名なオルガニストであり作曲家であったことから考えると、後者の「メソディスト教会は偉大な音楽家を誰も生み出していない。」という指摘は外れたもののようにも見えよう。しかし、彼らは国教会の中で職を得たり、カトリックに改宗したりなど、「メソディスト」ではなかったのである。さらにチャールズもまた、死ぬまで国教会の司祭であり、信徒たちに国教会からの分裂を厳しく戒めていた。だから、厳密に言うならば初期の「メソディストの音楽」とは、国教

会の教会音楽の一派の音楽と言えるのである。

チャールズは信仰を持って生きる日々の生活から、あらゆる瞬間を詩にうたった。その数は、生涯で4000とも6500とも言われているが⁷、それを編集し、時には流行歌に乗せてでもメソディストの信仰に取り入れていったのが、兄ジョンである。初期のメソディストたちがあらゆる場所で讃美した背景には、チャールズの湧き出る詩の泉があった事は間違いない⁸。そして、ジョンはメソディスト運動の推進において、「讃美」と「讃美歌を歌う事」にこだわった。その結果、メソディストは特徴的な讃美活動を展開する事となったのである。

ジョンの「讃美歌を歌う事」への執心は「信仰の応答だから」といった、一般的な見解だけで片付けられるものではない。彼は自分に従う信徒たちを導いていくために「讃美を歌う事」を必要としていた。それは、ジョンに自身に「讃美を歌う事」を契機とした信仰の体験があったためと考えられる。

1. ジョン・ウェスレーの宗教体験と讃美

ジョンが讃美の力を目の当たりにしたのは、1735年、北米への船中シモンズ号の海難の時であった。彼はジョージア伝道にむけ10月4日に出発したが、途中何度もひどい嵐に遭遇した。しかしそのような嵐の中で、同船していた26名のモラヴィア教徒⁹たちは、一心に讃美を歌っていたのである。ジョンは彼らの姿に深く感動し、彼らと話をするためにドイツ語の文法を習い、また彼らの讃美歌Freylinghausen Gesangbuchを学ぶようになる(Young 1995, 34)¹⁰。ジョンにとって、讃美が人々の内なる平安に繋がるものであることを確信した瞬間であった(Kimbrough 2006, 41-43)。

一方、ジョンが幼い頃からなじんだ聖歌は「アンセム」と呼ばれる詩編歌であり、アンセム¹¹にまつわる体験は、メソディスト誕生の発端となったウェスレーの信仰覚醒体験である、いわゆる「アルダスゲートでの回心」に関わるものである。

ウェスレーは、「アルダスゲートでの回心」を迎える朝(1738年5月24日)、セント・ポール大聖堂で詩編130編によるアンセムを歌った。詩編130編は、「深い淵の底から、主よ、あなたを呼びます」との神への呼びかけから始まり、「イスラエルよ、主を待ち望め。主は、イスラエルをすべての罪から贖ってくださる」との信頼の言葉で結ばれる。その日の夕べ、モラヴィア派の集会で「不思議に心が暖かくなるのを感じ」、劇的な回心のときを迎えることとなるのである。そし

て翌25日の午後に、彼は再びセント・ポール大聖堂に赴き、アンセムで詩編89編にふれるのである(Young 1995, 51-53)。

ここで注目されるのは、アルダスゲートでのウェスレーの回心における「ただキリストへの信頼」と「罪からの完全な自由の確信」が、当日の朝に歌われたアンセムに始まり、翌日の礼拝でのアンセムによって完成する、ウェスレーの一貫した讃美(詩編)と捉えられることである。言い換えるならば、メソディストの発端となった回心への路は詩編歌によって整えられ、最後には詩編歌の讃美へと、彼自身の現実を内包し、結実したと考えられるのである。

「アルダスゲートの回心」は、モラヴィア教徒たちとの出会いをもたらしたジョージア伝道に失敗し、ウェスレーが夜逃げ同然で逃げ帰ってきた直後の出来事であった。ウェスレーの暗い心を語る言葉が、古からの詩編アンセムにはあった。彼にとって詩編、そして讃美は神への応答と同時に、神の慰めとなり、同時に神と近づく具体的な方法として、自身の体験に基づく実感あるものとなったと考えられる。このような経験を経て、回心後のジョンが真っ先に手をつけたのが、讃美歌の編集と制作であった。

2. ウェスレーによる讃美歌の位置づけ

メソディスト運動を教育的な側面から捉えた論文では、ジョン・ウェスレーは讃美歌を歌うことの重要性を、会衆と歌うことを通して実感していったと分析する(Edger 1952, 66)。つまり、一心に讃美する信徒たちの姿を通して、ウェスレーは彼らが「讃美することは価値があることだ」と思っていることを知ったというのである(Edger 1952, 66)。その重要性は、祈りと会話の重要性とともに彼の日記に繰り返し言及されているものである。そのような信徒たちのためにウェスレーは、「歌うべき讃美歌」というだけでなく、「歌える讃美歌」を次々と提供して行った。実に、23冊の讃美歌集が出版されたが、そこには会衆讃美として全員で「歌うこと」そのものについての指導も含まれていた。

例えばウェスレーは、「聖なる旋律Sacred Melody」の序文に、メソディストにおける讃美の意義とともに、その基本線を以下のように示している。

1. 他の種類のTuneを学ぶ前に、まずここにあるものを先に学びなさい。
2. ここに書かれているように歌うこと。
3. みんなで歌いなさい。

4. 元気に、勇気を持ってうたいなさい。
5. 品格をもって歌いなさい。
6. テンポを守りなさい。
7. 何よりも霊的に歌いなさい。

特に注目すべきは、3においてジョンが「みんなで歌いなさい」という指示に続けて、「すべての人が歌うことによって礼拝の務めを果たし参加すること」と記していることである。このことから彼が、讃美を歌うことを礼拝における会衆の務めであると位置づけていることがわかる。それらの指示は、彼が讃美をあくまでも「会衆歌」としてとらえ、すべての者が歌う者とされるべきであるという、明確な方向性を持っていたことを示すものであると考えられる (Edger 1952, 67)¹²。

3. 「千の舌をもって Oh for the thousand tongues to sing」

ここで、個人の体験を共同体の共有する体験へとつなぐ讃美歌の例として、メソヂストの伝統の中で長く歌われ続けてきた“*Oh for the thousand tongues to sing*”をとりあげ、讃美歌による個人体験の共有について考える。

〈譜例1〉は、AZMONと呼ばれるTune旋律¹³である。メソヂストの讃美歌集には、いくつかの代表的な旋律があり、それぞれに名前が付けられている。「もし、曲においてメソヂスト派に独自性を認めるとするならば、幅ひろいジャンルからの借用といった既存の曲からの選択であろう」(馬淵 2004, 60)といわれるように、メソヂストの讃美歌の特徴は、1つの歌詞に様々なメロディーが引用され、当てはめられてきたというものである。もともとは別の歌詞がつけられていた旋律の上に自分の歌詞がのることを、チャールズは「世俗の恋人を略奪する」と言ったと伝えられている¹⁴。“*Oh for the thousand tongues to sing*”もAZMONに落ち着くまでには、様々な旋律¹⁵が用いられてきた。

AZMONというTuneそのものは、ドイツ人の Carl G. Glaserによって1828年に作曲されたものである。その後1839年にロウエル・メイスンの“*Modern Psalmody*”において編曲作品としてアメリカに紹介され、メソヂストが採用したのは1867年版からとされる。さらに、この“*Oh for the thousand tongues to sing*”に付けられるようになったのは1905年版以降で、その後これが“*Oh for the thousand tongues to sing*”の定番となっている。

この讃美歌の歌詞はチャールズ・ウェスレーによって発表されたのが1739年であり¹⁶、前年の彼の福音的回心を記念したものとされ、「メソヂスト運動の旗印」となってきた(北村 2004, 15)。〈譜例1〉のように、1779年以来、アメリカのメソヂストの讃美歌集ではたいていこの曲が第1番に置かれている。日本語では、1954年版の『讃美歌』で「主イエスの三一(みいつ)の」、1997年に新たに編纂された『讃美歌21』で「世にあるかぎりのことばをもて」と訳出されてきた。

また、〈資料2〉に見られるように、本来は18節もある非常に長いものであるが、いくつかの変遷を経て、現代の形に定着したと言われている。詩については、原作では〈資料1〉で8の番号をふった *Glory to God, and praise and love* が筆頭連にきていたという説もあり、現在の *Oh for the thousand tongues to sing* はモラヴィア派のペーター・ペーラーの表現に基づいているとの説もある。

〈譜例3, 4〉に日本語訳を付けられた楽譜を2つ載せたが、1997年に改訂された新しい翻訳である讃美歌21(譜例4)の歌詞「世にあるかぎりの」は、アメリカ合同メソヂストに即した形で訳されている。さらに、Tuneそのものの拍子が、1954年版(譜例3)では当時日本人にとって3拍子になじみにくかったという理由から、2分の2の拍子でなされている。この点も1996年版「世にある限り」では、より原曲に近い形に改訂された。

ここで注目したいのが、日本語ではほとんど訳出されていないが、歌詞の中で「私の〜」「私が〜」と一人称が非常に多く用いられていることである。これは、個人的な信仰体験が積極的に表現されている部分であり、個人的な思いを歌うモノローグとなっている。特に、第12連では

「私は主の償いの血を感じる。

私の魂のそばに。

私を、神の御子が私を愛された。

私を、この私のために、彼は死なれたのだ！」

と、非常に主観的で感情的な歌詞が歌われている。

ここだけを取り出してみれば、そこには他者の存在がいっさい想定されていないように見える。しかし実際には、この個人的な神への感謝や感動の吐露は、集会の中で会衆歌として歌われるとき、互いの思いが同じであることの確認の役割を果たす。“*Oh for the thousand tongues to sing*”の場合は、その後14連から「あなた(たち) you (r)」が用いられるようになり、最後には、「みなで讃えよう!」と会衆である共同

体全体への呼びかけ、あるいは同じ思いの叫びとなって終わるのである。つまり、個人的な思いは会衆で讃美歌されることを通して共同体の相互のメンバーに確認、共有され、やがて共同体全体の思いとして表明されるというプロセスをたどるのである。

IV. おわりに

―共同体の一致を再現する要素としての音楽： 個人の体験を共有するツールとして

「政治的機能を持つ公共性は、17、18世紀の交に、イギリスに初めて成立する」（ハーバーマス、86）というハーバーマスの指摘するまさにその時期に、ジョン・ウェスレーは育った。ハーバーマスによると、公共圏に参加するためには「教養が一つの入場基準であり、財産が、もうひとつの入場基準である。この2つの基準は大幅には同一の人員範囲に適用される。というのは学校教育は当時、特定の社会的地位につくための前提条件というよりも、むしろその社会的地位からの帰結であり、そしてこの地位は、主として財産を基準にして定められていた」（ハーバーマス、116）とする。また当時の初等教育は十分なものではなく、文盲率も増加傾向にあり、中でも大衆のほとんどは文盲であった。さらに、生活の水準も最低のレベルの占める割合が過半数であったと言われている（ハーバーマス、58）。メソディストはまさに、この層の人々にむけてなされた伝道と、実状に即した対応によって勢いを増していったのである。

ウェスレーは存命中に多くの讃美歌集を出しているが、これらは「購買層」がなければ達成できない筈である。しかし、それを支えるしくみがメソディストにはあった。ウェスレーは組織運営の手段として「組会」というシステムをつくる。これは小グループで集まり、集会を行ったり、お互いを行き来したりすることで絆を作る方法である。そこで決められていた事が「すべての組会に本が支給される事」（山中 1990, 92）であった。もちろん、そこには讃美歌も常備され、集会に用いられた。またイギリスでは1750年頃から、「読書サークル」が発達し、さらに新聞等の媒介によって、共通した考えをもつ公衆が形成されていった。ハーバーマスは、彼らが一つの公共圏を形成し、この中で小家族的親密性に由来する主体性が自己理解をとげたとするが（ハーバーマス、72）、その現象こそがメソディストの組会であり、読書サークルの要素と小家族的親密性を持つつながりを実現し、「自己理解」へと導く

ものとなっていたと考えられるのだ。

先にも触れたように、ウェスレーは讃美歌集の序文や様々な機会をとらえて、讃美歌の歌い方についての細かな指示を与えている。そこに主張されるウェスレーによる讃美へのこだわりと規定は、当時の人々にとって「しぼり」となるよりもむしろ、信徒として彼らの共同体意識を支える要素となっていた。なぜなら、そこには「何を目指せばいいのか、そのためにどのようにすればいいのかを人々に具体的に明示」（山中 1990, 45）されていたからである。同時に「〔そのような決まりは〕伝統的な意味秩序の解体に晒されていた人々にとって、自分たちの生活を律してくれる身近で新しい目標」（同前）ともなった。

社会構造の変換によって「土地」という絆から切り離された人々であったメソディストは、何よりも共同体とその一員であるという所属意識を必要としていた。彼らは、宗教的信念と実践の規範を提供してくれ、その実践を通して「共同体の一致」が実感できるメソディスト運動に惹かれていったのである。そして、自分たちの宗教的信念を表明・確認し、実践そのものの1つとなっていたのが「讃美」であり、共に歌う場である「集会」や「組会」であったのだ。一時期、メソディストはその参加がチケット制になるが、彼らはメンバーの証であるこのチケットを「呪物」のように大切にしていたという（山中 1990, 44）。なぜなら、土地の縛りから解放された代わりに仕事を求めて歩き移動労働者にとって、それは新しい共同体への「入場券」であり、故郷の代わりに手に入れられた「たった一つの共同体」であったからである（山中 1990, 44）。

20世紀後半からの公共性と宗教の議論の中では、「ポストモダン」や「第2の近代」を語る際に「個人化」という概念が用いられ、「共同体の崩壊と世俗化、あるいは宗教の『私事化』を同時的な事柄と理解」（島藺 2004, 3）してきた。その延長線上に、宗教社会学においては宗教復興の潮流を読み、昨今の新興宗教の興隆やスピリチュアルな要素を重視する傾向を位置づける。一方で、宗教社会学の島藺は、伝統宗教や近代に発展した宗教について、その主要な機能が個人を超えて共同体の結束を強め、集団の統合をもたらすものであるという定義は当てはまるとしており（島藺 2004, 4）、メソディストもまたそれに合致する例の1つと言えるだろう。

メソディストの場合は、この両方に合致する。なぜ

ならメソディストは、言わばウェスレーの個人的な信仰的覚醒と、人生の中で連続して起こる「聖化」という体験を源とし、そのエネルギーがメソディストのアイデンティティーとなって今日まで続いてきた特徴をもつからだ。つまりメソディストは、伝統宗教における「個人を超えて共同体の結束を強め、集団の統合をもたらす」ことに成功しながら、現代における宗教の「個人化」を先取りした形で存続してきたと言えるのである。そこには、「会衆歌」（共同体の歌）として設定された個人的な讃美歌の影響が大きい。

もちろん、讃美の力を用いたのは、メソディストが初めてというわけでも、だけであつたわけでもない。実際、初期のキリスト者はユダヤ教の一派から自分たちを区別するために独自の聖歌を整えていき、グレゴリオ聖歌はローマの絶対的な権威を世界に浸透させるために、各地にそれまであつた聖歌を淘汰させるものとして成立した背景を持っていた。それほど、歌には多くの人を結集させ、コントロールする力が確かにあるのだろう。

それらとメソディストの讃美の決定的な違いもまた、そのきっかけとなつたのが、モラビア教徒との出会いや「アルダスゲートの回心」といった、あくまでウェスレー個人の体験であるという点である。ウェスレーは信徒たちに対しても、宗教体験を重視した。「体験」という以上、それはどこまでも個人的・主観的であり、「宗教の主観化」（山中 1990, 20）に通じる。メソディストはそうにして「個人」と「共同体」の狭間の、微妙なバランスの上に成立したと言えよう。

死ぬまで国教会の司祭であつたウェスレーに従いながら、彼の死後国教会から離脱したメソディストは、今まで見てきたように、始まりから常に複数の方向性と矛盾を内包し続けてきた。伝統的宗教感覚と新しい宗教感覚とのほざまで織りなされてきたメソディストの讃美歌の研究は、共同体の一致と音楽との関わりにおける普遍的理解とともに、それと矛盾する、個人をそのまま飲み込んだかたちでの「公共性」の理解に新たな視点を提示するものである。

〈参考文献表〉

Edger, R. Frederick 1952. *A Study of John Wesley from the Point of View of the Educational Methodology used by Hymn in Fostering the Wesleyan Revival in England*. Ph.D. diss., Columbia University 1952

ハーバーマス・ユルゲン『公共性の構造転換－市民社会の一カテゴリーについての研究－』細谷貞雄、山田正行訳 1994年5月、未来社

稲垣久和、金泰昌、編 2006『宗教から考える公共性』ヨルダン社、東京

Kimbrough Jr., S.T., ed. 2007. *Music and Mission : Toward a Theology and Practice of Global Song*. Cokesbury Nashville, U.S.A.

Lightwood, T. James

1935. *The Music of The Methodist Hymn-Book*. The Epworth Press, London, U.K.

1905. *Hymn-Tunes and Their Story*. Charles H. Kelly. London, U.K.

馬淵彰「チャールズ・ウェスレー－福音と出遭つた詩人」『福音主義神学』35号, 2004年12月, pp. 57-79, 東京

ショウ・スコット「初期メソジスト教会の礼拝音楽」『礼拝と音楽』2004年秋号 No.123, pp.8-13 (ショウ万里子訳), 日本基督教団出版局, 東京

Wesley John,

The Works of John Wesley, 14 vols., (Michigan : Baker Book House, 1979) Rep. from the 1872 edition issued by Wesleyan Methodist Book Room, London, Vol.XIV, 'List of Poetical Works' pp. 319-45, 'Musical Works' pp. 345-46

1877 *Collection of Hymns : for The Use of The People Called Methodists* : with a New Supplement. Wesleyan Conference Office, London

山中 弘 1900『イギリス・メソディズム研究』ヨルダン社、東京

山内一郎「ウェスレーの心－『とりわけ霊的に歌いなさい』」『礼拝と音楽』2004年秋号 No.123, pp.4-7, 日本基督教団出版局, 東京

Young, C. Carton 1995. *Music of The Hart : John and Charles Wesley on Music and Musicians*. Hope Publishing Company, U.S.A.

〈楽 譜〉

讃美歌委員会編『讃美歌』1954年, 日本基督教団出版局

讃美歌委員会編『讃美歌21』1997年, 日本基督教団出版局

〈註〉

- ¹ 「ウェスレーを教会史の中でどう位置づけるかについては、専門家の間でもずいぶん議論があります。－中略－しかし、ウェスレーの中にはいろんな流れが入り込んでいて、それが結果的にはウェスレーをある意味でわかりにくくしているのです。」(山内 2004, 4)
- ² 山中は著書の中で、1761年から1831年までのウェールズ地方の人口の推移を表に挙げ、人口分布の重心の変化(地域によって、41%－8%の増加率)を示している。それによると、「南、東部から北、西部への人口の重心の移動は、－中略－伝統的に国教会の組織が弱体である地域への人々の流入を意味」し、以前から比較的高い人口密度に達していた伝統的な農業地域とは違い、人々が他の地域から流入しやすかったとする。
- ³ 山中によると、19世紀前半までのメソジストたちの職種は、職人層が62.7%多くを占めており、彼らは「大工、洋服屋、製革工、石工などの社会的地位の高い独立した熟練職人よりも、その下位に属する織工や紡績工、さらに編物師や釘製造工などの職人層が占め」ており、それはウェスレーの日記の記述にも合致するという(山中 1990, 41)。
- ⁴ 『ニューグローブ世界音楽大辞典』, 「ウェスレー」の項参照。
- ⁵ ショウ万里子による, Snaveley, E. Guy. and Young, Carton. *The Encyclopedia of World Methodism*, 1974 ed., s.v. "Hymn writers" の和訳(ショウ 2004, 8)。
- ⁶ 〈資料1〉ウェスレー家の家系図参照
- ⁷ 数字に開きがあるのは、チャールズが小さなメモや手紙の端など、あらゆる紙・スペースに詩作をしたため、どのレヴェルまでを「詩」として認めるのか、研究者たちの間で見解が分かれていることも原因とされている。
- ⁸ 「彼〔チャールズ〕の作品は確かに「メロディー豊か」なものである。しかし、讃美歌がまだ読むものとの考えが残っていた時代にチャールズは生きていた。メソジスト派の会衆讃美に独自性をもたらしたのは、曲ではなく彼が作詩した讃美歌にこそある。」(馬淵 2009, 60)
- ⁹ モラヴィア教徒とは、十四世紀末、現在のチェコ共和国東部のモラヴィア地方と呼ばれる場所に起源を持つ信仰のグループのことである。東部モラヴィアと中西部ボヘミアからなるチェコは、音楽的・文化

的に非常に豊かな伝統をもつ。彼らは、政治的な思惑もあって異端とされ、何度も迫害を受けて流浪の民となった。ウェスレーの生きた時代には、ドイツにあった自分の領地内にモラヴィア教徒の入植を許したツィンツェンドルフ伯爵によって、現在に続く発展の糸口をつかむことになった。ウェスレーはモラヴィア教徒との親密な交わりもあって、ツィンツェンドルフ伯爵と会見も果たしている。

十八世紀のモラヴィア教徒の音楽のスタイルは、その源流の一つである十五世紀の「ボヘミア兄弟団」の伝統から来ており、ツィンツェンドルフ伯爵にとって讃美することと「讃美の時間Singstunde」は、信仰生活において最も重要なものであった。なぜなら、讃美は熱心で敬虔な信仰の現れであり、会衆の霊的な調子を測れるとするからである。そんな彼らの讃美はルターに習い、礼拝において合唱やオルガン、あるいは他の楽器も用いてなされるものであった。

なお、彼らの働きは「ローズンゲン」など、現在も世界に展開されている。

- ¹⁰ ジョンによるモラヴィア教徒たちの「讃美の時間」についての記述は10月19日付の日記から始まり、その後旅が終わるまで何度も記されている。また、讃美の練習は10月27日から始められた(Young 1995, 34)。

- ¹¹ 「アンセム」とは、国教会において普通朝課と晩課で歌われるもので、中世カトリック教会の「モテット(モテトゥス)」と類似したものである。モテットという形は、もともとある聖歌(グレゴリオ聖歌)に、歌詞の内容を説明する歌詞を別声部として付け加えたものをさす。

モテットは、かつてフランスを拠点とするノートルダム楽派で発達したため、後には既存の聖歌部分はラテン語、モテット部分はフランス語という、多声部・多言語の独特な形をとるものとなった。ウェスレーが歌っていたのは、英語によるもので、彼は、その伝統的なアンセムを日々の礼拝の中で歌っていた。

- ¹² 「彼ら〔メソジスト〕は礼拝の讃美の部分を、より神を受け入れやすく、よりすべての注意を集中させられるものとしようとしていた。」(Edger 1952, 67)

- ¹³ 〈譜例1〉参照。

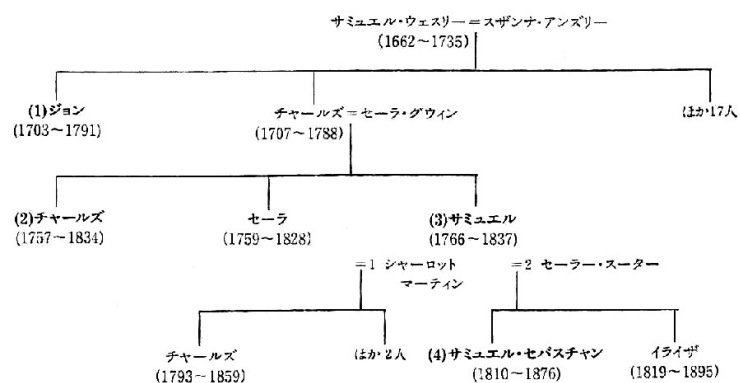
- ¹⁴ 『ニューグローブ世界音楽大辞典』, 「ウェスレー」の項参照。

¹⁵ 〈譜例2〉参照。今までに使用された旋律名としては、“Winchester” “Lydia” などがある。

¹⁶ 初出は、“*Hymns and Sacred Poems*” (1740)。

(平成21年11月26日受理)

〈資料1〉 Wesley 家の家系図『ニューグローブ世界音楽大辞典』, 「ウェスレー」より転載



〈資料2〉

“Oh for the thousand tongues to sing”

Charles Wesley

1. O for a thousand tongues to sing
My great Redeemer's praise,
The glories of my God and King,
The triumphs of His grace!
2. My gracious Master and my God,
Assist me to proclaim,
To spread through all the earth abroad
The honors of Thy name.
3. Jesus! the name that charms our fears,
That bids our sorrows cease;
'Tis music in the sinner's ears,
'Tis life, and health, and peace.
4. He breaks the power of canceled sin,
He sets the prisoner free;
His blood can make the foulest clean,
His blood availed for me.
5. He speaks, and, listening to His voice,
New life the dead receive,
The mournful, broken hearts rejoice,
The humble poor believe.
6. Hear Him, ye deaf; His praise, ye dumb,
Your loosened tongues employ;
Ye blind, behold your Savior come,
And leap, ye lame, for joy.
7. In Christ your Head, you then shall know,
Shall feel your sins forgiven;
Anticipate your heaven below,
And own that love is heaven.
8. Glory to God, and praise and love
Be ever, ever given,
By saints below and saints above,
The church in earth and heaven.
9. On this glad day the glorious Sun
Of Righteousness arose;
On my benighted soul He shone
And filled it with repose.
10. Sudden expired the legal strife,
'Twas then I ceased to grieve;
My second, real, living life
I then began to live.
11. Then with my heart I first believed,
Believed with faith divine,
Power with the Holy Ghost received
To call the Savior mine.
12. I felt my Lord's atoning blood
Close to my soul applied;
Me, me He loved, the Son of God,
For me, for me He died!
13. I found and owned His promise true,
Ascertained of my part,
My pardon passed in heaven I knew
When written on my heart.
14. Look unto Him, ye nations, own
Your God, ye fallen race;
Look, and be saved through faith alone,
Be justified by grace.
15. See all your sins on Jesus laid:
The Lamb of God was slain,
His soul was once an offering made
For every soul of man.
16. Awake from guilty nature's sleep,
And Christ shall give you light,
Cast all your sins into the deep,
And wash the Æthiop white.
17. Harlots and publicans and thieves
In holy triumph join!
Saved is the sinner that believes
From crimes as great as mine.
18. Murderers and all ye hellish crew
In holy triumph join!
Believe the Savior died for you;
For me the Savior died.
19. With me, your chief, ye then shall know,
Shall feel your sins forgiven;
Anticipate your heaven below,
And own that love is heaven.

〈譜例 1〉

The Methodist Hymnal



OFFICIAL HYMNAL
OF THE
METHODIST EPISCOPAL CHURCH
AND THE
METHODIST EPISCOPAL CHURCH, SOUTH

LIBRARY
OF
OSAKA CHRISTIAN COLLEGE

THE METHODIST BOOK CONCERN
NEW YORK CINCINNATI

2622

The Methodist Hymnal

Worship

Adoration and Praise

I AZMON C.M.

CARL G. GLASER. Arr. by LOWELL MASON



1. O for a thou-sand tongues to sing My great Re-deem-er's praise,
The glo-ries of my God and King, The tri-umphs of his grace! A - MEN.
- 2 My gracious Master and my God, His blood can make the foulest clean;
Assist me to proclaim, His blood availed for me.
- 3 Jesus! the name that charms our fears, He speaks, and, listening to his voice,
That bids our sorrows cease; New life the dead receive;
'Tis music in the sinner's ears, The mournful, broken hearts rejoice;
'Tis life, aid health, and peace. The humble poor believe.
- 4 He breaks the power of canceled sin, 6 Hear him, ye deaf; his praise, ye dumb,
He sets the prisoner free; Your loosened tongues employ;
Ye blind, behold your Saviour come;
And leap, ye lame, for joy.

CHARLES WESLEY

〈譜例 2〉

A

COLLECTION

OF

H Y M N S,

FOR THE USE OF THE PEOPLE CALLED

M E T H O D I S T S.



L O N D O N:

Printed by J. PARAMORE, at the Foundry, 178o.

[PRICE THREE SHILLINGS, 5s. 6d.]

96.

HYMN 128.

Westminster.



4. The tune 'Westminster' from *Sacred Melody* (1761); see Hymn 374

〈譜例3〉

礼 拝 開 会

O for a thousand tongues to sing
Charles Wesley, 1739

AZMON
Arr. from Carl Gottlieb Glaser (1780)
by Lowell Mason, 1839



- | | | | | | | |
|---|-----------|---------|---|----------|----------|----------|
| 1 | 主イエスのみいと | みめぐみとを、 | 3 | うれいをなぐさめ | おそれを取る | ルカ 1-47 |
| | ことばのかぎりに | たたえまほし。 | | み名をばつみびと | 聞くうれしき。 | 5 |
| 2 | とうときわが主よ、 | たかき御名を | 4 | くらきのちからを | イエスはくたき、 | 死にたるころも |
| | ひろむるこの身を | たすけたまえ。 | | 血をもてあがない | すくいたもう。 | 活きかえらせ、 |
| | | | | | | のぞみをあたうる |
| | | | | | | み名をたたえん。 |

〈譜例4〉

礼 拝 招 き
世にあるかぎりの

[162]

O for a thousand tongues to sing
詞 : Charles Wesley, 1707-1788

AZMON
曲 : Carl G. Glaser, 1784-1829



(♩=80.)